NITELA (*RHINONITELA*) (ケラトリバチ亜科) 日本に産す

常　木　勝　次

Discovery of *Nitela* (*Rhinonitela*) *domestica*, a Philippine species, in Central Japan (Hymen., Sphec., Larrinae)

By. K. TSUNEKI

CERCERIS GEBOHARTI NOM. NOV.

for *Cerceris boharti* Tsuneki, 1968, nec *C. boharti* Scullen, 1965

By K. TSUNEKI

生物研究 (福井) 第XIII巻 第3-4号 37～39頁別刷

Reprinted from The Life Study (Fukui), Vol. XIII, Nos. 3-4, pp. 37-39

October 30, 1969 g, h

NITELA（*RHINONITELA*）（ケラトリバチ亜科）日本に産す

常　木　勝　次

Discovery of *Nitela* (*Rhinonitela*) *domestica*, a Philippine species, in Central Japan (Hymen., Sphec., Larrinae)

By K. TSUNEKI

Nitela (*Rhinonitela*) *domestica* (Williams, 1928) was described from the Luzon of the Philippine Islands and later discovered in the southern district of Formosa by Iwata in 1937. Since then, however, apparently no record of capture has been made until now.

Recently I had a chance of examination of a tiny wasp specimen collected by Mr. Y. Haneda in Nagano Pref., Central Japan, which he recorded as a species of *Nitela* on page 55 of Vol. 12 of this Journal, and was surprised to know that it was no doubt a female of the species above mentioned. The remote separation of the locality of the present specimen from those hitherto known, especially the great difference in latitude, made me presuppose the presence of some geographical variation in the specimen. However, as far as the original description and the recent key of the allied species by Menke are concerned I can not find any note-worthy difference on the specimen except that the appendiculate cell is completely lacking in the fore wing. In this paper I attempted to redescribe the species for the general entomologists of Japan (Head seen in front: Fig. 1, seen from the side: Fig. 2, seen from beneath: Fig. 3, wing venation: Fig. 4). The taxon of the species is somewhat differently treated from the opinion of A. S. Menke (1968).

本誌第12巻，3・4号に羽田義任さんが長野県伊那地方のアナバチ科のリストを掲げられた中に *Nitela* 属の1種が記録されている。私はその標本を見せてもらったときに，旧北区から知られた種とは明らかに異なることがわかったので，多分新種であろうと述べておいた。ところが今回その標本を精査してみて，これは *Nitela* 属から分離しなければならないものであることに気づき，この属に近縁な既知属を検討した結果，比島（ルゾン）および台湾南部（墾丁公園）から知られた *Rhinonitela* Williams に該当することを知った。更に種について検討してみたところ，意外にも，これが比島・台湾産の *R. domestica* Williams とよく合致することが明らかになった。しかし長野県と比島との緯度の差は大きいし，常識的には当然地理的変異のあることが予想されるので，入念に原記載（かなり詳しい）と比較してみたが，前翅径室の付属室を欠くこと（原記載でもこの脉は弱いことになっている）のほか，取立てて述べるほどの差異を見出すことはできなかった。将来比島産の標本とこれとを直接比較することができたら，あるいは他の細かい差異が見つかるかもしれないが，現状では新亜種を設定する必要はないようである。

Nitela (*Rhinonitela*) は日本には全く珍しいハチであるから，以下にその特徴と日本産の種について概説することにするが，その前にこの亜属の分類学上これまで扱われた経過について簡単に述べておこう。

Williams が *domestica* を記載したとき，この種をタイプとして *Rhinonitela* という新属を創設した（Rhin は鼻の意で，顔面に隆起のある動物によくこの字が冠せられる。たとえば *Rhinoceros* サイ）。その後彼はこの属に南米産の *guiana* Williams を加えた。ところが1937年に Pate はこの種の検討から，*Rhinonitela* は同じく南米（ブラジル）から記載された *Tenila* の synonym となることを発見し，以後，最近まで比島の種についても，この属名が用いられてきた（例えば Baltazar の比島産蜂類目録）。ところが昨 1968 年に Menke は *Nitela* およびその近縁属の検討から，*domestica* は *Tenila* に入らぬこと，*Rhinonitela* と *Nitela* との間には中間型が多くあり，完全分離は困難であることの理由から，それらをことごとく *Nitala*

の中に含めてしまうほうがよいという結論を出した。しかし私はそれらの型は *Nitela* (*Nitela*) とはかなり違うのだから，それぞれ亜属の段階で分けた方がよいと考え，表題のように扱ったわけである。

なお Menke は *Tenila* Brèthes を *Nitela* の亜属として扱っている。

さて，属の問題をそれくらいにして，次にこんど日本から発見された *domestica* という蜂についてのべよう。

まず他のニテラバチ（ヤスマツニテラ，オオグシニテラ）と共に，ケラトリバチ亜科の他の属から

（1） 前翅肘室（亜前縁室）はただ1個である。

（2） 後単眼は変形せず，丸い。

（3） 複眼に微毛が生えている。

の3点で区分できる。次に *Nitela* (*Nitela*) からは，

（4） 前額下端から頭楯にかけて中央線は高く隆起して稜となり，くちばし状に彎曲する。その両側は深くくぼむ。という特徴で区別できる。なお，この種は 3 mm 以下の非常に小さい蜂だという特長もある。

次に種について記すと次のようである。

Nitela (*Rhinonitela*) *domestica* (Williams, 1928)

和名： スジニテラ

Rhinonitela domestica Williams, Bull. Exp. Sta. Hawaii Sug. Pl. Ass., Ent. Ser., 19: 98, 1928 (♀, Philippines: Luzon).

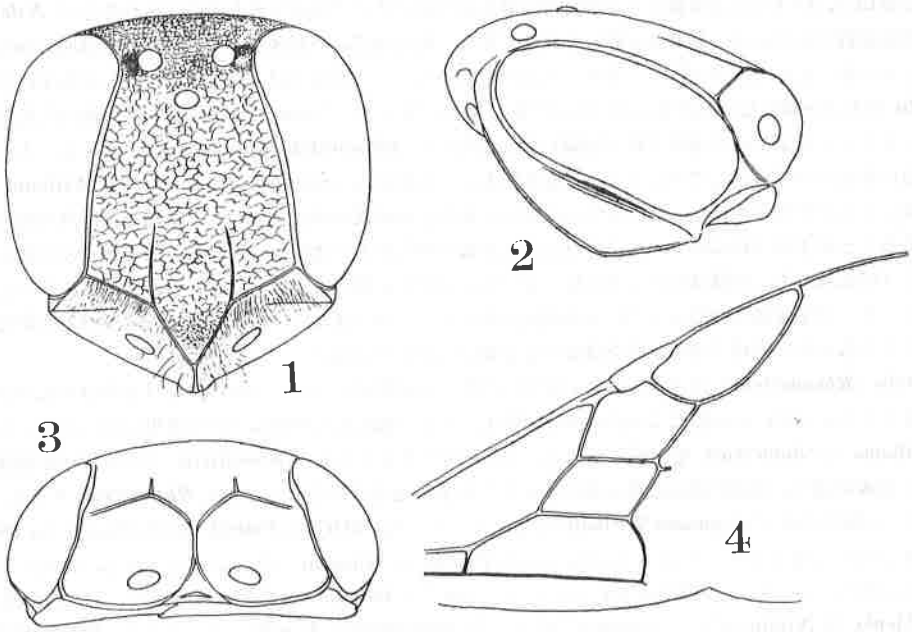
Rhinonitela (?=*Tenila*) *domestica*: Pate, Bull. Brooklyn Ent. Soc., 32: 5, 1937.

Tenila domestica: Pate, Mem. Amer. Ent. Soc., 9: 56, 1937.

Rhinonitela domestica: Yasumatsu, Mushi, 12 (1): 12, 1939 (♀, Formosa: Kuaru, now Kentin Park).

Rhinonitela domestica: Iwata, Ibid., 13-16, 1939 (Biol.).

Tenila domestica: Baltazar, Pac. Ins. Monogr., 8 (Cat. Philippine Hym.), 327, 1966.



1，スジニテラの頭部前面。 2，同側面（右側）。 3，同，下面。 4，翅脈。

Tenila domestica: Tsuneki, Etizenia, 20: 12, 1967.
Nitela sp. Haneda, Life Study, 12 (3·4): 55, 1968.
Nitela domestica: Menke, Mushi, 12 (10): 137, 1968.

♀. 体長 2.7 mm。全体黒色，触角先端赤褐；口ひげ，脚付節（先端部黒）は黄褐；触角鞭節基部数節および下面，翅脉は褐ないし黒褐；翅は透明。

単眼は直角二等辺三角形に配置，OOD：POD ≒ 1：3，頭部前面：Fig. 1，同側面：Fig. 2，下方より見ると中央稜は三角状に広がる（Fig. 3），後頭稜は明瞭で頭下に達する。触角第2・4節は等長，第3節はわずかに長く先端の幅の2.3倍，以下の節は11節まで順次少しずつ短い；頭頂における両眼間の距離は触角節2＋3＋4にほぼ等しい。前胸背の肩部は丸く，後縁中央部くぼみ，その正中線に短縦稜がある，中胸背前縁中央もくぼむ，中胸側の前部および下部に点刻のある溝がある；中節後面は切断状で平ら，その上方・側方とも稜線によって囲まれる。腹部に尾域を欠く。脚の脛節刺は前・中脚で1本，後脚で2本である。翅脉（Fig. 4）は *Nitela yasumatsui* に近い。

顔面の彫刻は粗い網目状，頭頂部では細かい，顔面下部と頭楯にまたがる前方両側のくぼみは微小点刻をもち、その大部分に銀白毛を密生する。複眼後方部（temple）は彫刻不明瞭，下方に弱い横条がある。前・中胸背板と楯板は顔面より細かい網目状彫刻，褐色の毛でやや疎らにおおわれる，中胸側は滑沢，よく光るが下方では光輝は鈍る，中節背は縦条を主とした網目模様，*Nitela yasumatsui* よりややあらい，その側面に縦条，後面に横条，共にかなり強く，ややあらい。腹部は点刻を欠き，光輝に富む。

標本：1♀，長野県上伊那郡長谷村宇津木，13. Ⅷ. 1968，羽田義任採集。

付記　なお台湾で岩田博士の観察した蜂は穴の直径 2 mm ほどの細い竹筒に造巣し，チャタチムシの若虫を prey として狩ったという。獲物に対する卵の産付位置は *Tachysphex* など他の Larrinae と同様，また1巣には常に1育房しか造らず，筒の閉鎖には種々の粒状物を積み上げたということである。

このハチは非常に小さいから，うまく造巣場所（柱の虫穴も利用する）でも見つけない限り，狙って採れるものでない。むしろ sweeping に期待したほうがよいように思われる。ただ岩田博士は述べていないが，このハチが他の *Nitela* のように，柱の上などを足早に歩行する習性があるかもしれぬから，そういう点に注意するとよいと考えられるが，この点はまだわかっていない。なお網に入った場合コバチ類と区別するには，これでは触角が長いことに注意すればよいであろう。

CERCERIS GEBOHARTI NOM. NOV.
for *Cerceris boharti* Tsuneki, 1968, nec *C. boharti* Scullen, 1965

By K. TSUNEKI

Through the courtesy of Dr. Herman A. Scullen, Professor Emeritus of the Oregon State University, I knew that *Cerceris boharti* Tsuneki (Trans. Shikoku Ent. Soc., 9 (4): 107, 1968) had been preoccupied by *Cerceris boharti* Scullen (Proc. U. S. Nat. Mus., 116: 345, 466, 1965). I want to rename the species as above basing on my original intention to dedicate the trivial name to Dr. G. E. Bohart, the collector of the type specimen.

四国昆虫学会会報9巻4号107頁に記載した琉球産ツチスガリの1種の種名，*Cerceris boharti* Tsuneki，は北米アリゾナ産の *Cerceris boharti* Scullen に先取されていることがわかったので，上記のように改名した。和名は ボハートツチスガリ としたい。